

タイトル

皮膚赤外線体温計による乳児の前額部表面温の生後半年間の発達特徴

ピジョン株式会社 中央研究所

阿部 晃子、黒石 純子、斉藤 哲

【目的】

体温の発達特徴として、新生児期は成人と比べ高く生後4ヶ月頃に温域が下がることが腋窩温等で示されているが、額表面温の発達特徴は明らかではない。本研究では生後0～5ヶ月の額表面温を縦断的に調べ、室温の影響および腋窩温との比較を含め発達特徴を検討した。

【方法】

母親より同意が得られた2012年5～6月生まれ(春群、n=7)と8～9月生まれ(夏群、n=5)の乳児を対象とした。生後半年間、皮膚赤外線体温計(ピジョンH20)を用いて額中央部表面温を毎月7日分、1日4回(7、10、15、18時)自宅で母親が検温し、室温等を含め記録した。毎月の平均値を各児の月齢代表値とした。

【結果と考察】

額表面温および腋窩温は、春・夏両群で生後半年間に有意に低下した。平均値の範囲は、額表面温が春群 $33.5 \pm 0.5 \sim 35.2 \pm 0.4^{\circ}\text{C}$ 、夏群 $33.2 \pm 0.9 \sim 35.2 \pm 0.2^{\circ}\text{C}$ 、腋窩温が春群 $36.7 \pm 0.2 \sim 37.1 \pm 0.1^{\circ}\text{C}$ 、夏群 $36.6 \pm 0.3 \sim 37.1 \pm 0.1^{\circ}\text{C}$ であった。低下する月齢はそれぞれ異なり、額表面温は春群は4、5ヶ月、夏群は1、2ヶ月、腋窩温は春群は1、4、5ヶ月、夏群は1、3ヶ月に有意に低下した。額表面温と腋窩温はいずれも室温変化の影響を受け、特に冬季に向かう室温低下の影響を強く反映していた。今後、通年調査により季節変動を含めた額表面温の発達特徴を検討する予定である。